

北大構内の昔と今 / 姉帯 正樹・島崎 昭・荒磯 恒久

(北海道大学理学部化学同窓会)

前編およびグラビア:第 63 号(2015 年)

中編:第 64 号(2016 年)

後編:第 65 号(2017 年)

※化学同窓会誌「るつぼ」より再掲

この度、北海道大学理学研究院化学同窓会および著者様より、上記の記事を薬学部同窓会ホームページに芳香 HISTORY-8 として再掲することについて快くお許しをいただきました。この記事は北大構内の建物を歴史的に述べたもので、薬学同窓会員の皆様が北大を再訪する際に予め読んでから、またはコピー片手に散策されると以前とは異なった感激が得られると思います。どうぞお楽しみください。

2022 年 7 月 22 日 松田 彰 (15 期 同窓会長)

北大構内の昔と今

姉 帯 正 樹・島 崎 昭・荒 磯 恒 久

るつぼ 別刷

前編及びグラビア

第63号 pp.86-99 平成27年2月

中編 第64号 pp.77-84 平成28年2月

後編 第65号 pp.51-60 平成29年1月

北海道大学理学部化学同窓会

カラーグラビア — 北大構内の昔と今

- 1 頁目全 3 葉 撮影・提供：谷本憲彦（化学53期）
- 2 頁目上 2 葉 丹羽貴知蔵先生旧蔵アルバム（北方資料室蔵）より
他 4 葉 撮影：島崎英一（化学 6 期）
提供：島崎 昭（化学44期）
- 3 頁目右下 撮影：秋山瑠美（事務局）
他 5 葉 撮影：姉帯正樹（化学42期）
- 4 頁目左上 撮影・提供：新谷光二（化学26期）
他 5 葉 撮影：姉帯正樹



理学部本館前のクロフネツツジ

昭和61年（1986）5月下旬



冬の理学部南ローン

昭和61年（1986）1月



冬のポプラ並木

昭和58年（1983）2月頃



建設間もない理学部北面とポプラ
昭和6年(1931)春



太秦康光先生宅(左)と小熊稔先生宅
昭和7年(1932)初夏



明治42年に林学教室として建設された
古河記念講堂

昭和33年(1958)



当時の教養部である旧畜産学教室(左)と
獣医学部教室

手前の広場は現在の図書館前庭
昭和33年(1958)



旧札幌農学校図書館読書室

昭和31年(1956)11月12日



モデルバーン(模範家畜房)

昭和33年(1958)



解体直前の旧山下生化学研究室

現在は歯学部駐車場

昭和55年（1980）10月



**山下生化学研究室バルコニーから
理学部本館を望む**

昭和50年（1975）2月



**改装され理学部七号館となった
旧化学第二学科研究棟**

平成26年（2014）10月31日



**本館の化学科7研究室が引っ越した
理学部六号館**

旧触媒研究所南側、左は遺伝子実験施設

平成26年（2014）10月31日



化学同窓会コーナー

化学科講義室 7-310（旧C-316）横

平成26年（2014）1月8日



**講義などで使用される理学部五号館
大講堂**

平成26年（2014）11月7日



解体直前の柴田記念館（旧金属化学研究室）
平成6年（1994）3月15日



**本部福利施設棟ファカルティハウス・
エンレイソウ**

柴田記念館跡地に1995年新築
平成26年（2014）10月31日



憩いの場となっている大野池
工学部南側 平成26年（2014）9月29日



観光客で賑わう晩秋のイチョウ並木
平成25年（2013）11月6日



平成ポプラ並木
北大球場南側に2000年10月植樹
平成26年（2014）9月22日



再生中のポプラ並木と理学部高層棟遠景
左からJRタワー（白）、理学部二、五、六号館（茶）
平成26年（2014）10月8日

北大構内の昔と今（前編）

編集理事 姉帯 正樹
(化学科42期)

島崎 昭
(化学科44期)

はじめに

新しく編集理事となった島崎が父英一（化学6期）の遺品を整理中、昭和30年代前半に撮影されたカラースライドを発見しました。早速、PCに取り込み、何らかの形で使えないかと編集委員会で提案したところ、姉帯がかねてより近年変貌著しい北大構内を写真で紹介しようとの構想を抱いていたこともあって、本号の巻頭カラーグラビアとして紹介することになりました。

各々の写真の下に詳しい解説を付けることができませんので、関係する事柄を資料としてまとめ、本欄で紹介することにします。各項目の後のG1～4はグラビア1頁目から4頁目を示しています。図1～5に大正15年（1926）頃、昭和30年（1955）頃、昭和46年（1971）頃及び現在のキャンパス平面図2枚を示しますので参考にして下さい。

なお、紙幅の関係上、今回は理学部とその周辺を中心に紹介し、中央部から北キャンパスにかけての変貌ぶりは来年度以降に紹介する予定です。（A, S）

理学部とエルムの森（G1）

札幌は、定山溪の奥にある小漁岳近くを水源とする豊平川の扇状地の上に築かれた街です。洪水になっても直ぐに乾いてしまうところから、アイヌ民族は「乾いた大きな川」を意味する「サッポロベツ」という名を与え、これが札幌の由来とされています。標高は扇頂の真駒内付近で80～90m、末端の札幌駅北側で15m。自転車を漕ぐことで、南高北低を実感された人も多いと思います。

豊平川の水は扇状地の下に浸透し、その伏流水は再び湧泉（アイヌ語でMEM）となって札幌市内各地で噴出しました。その名残が植物園や道庁前の池、後出の大野池、サクシュコトニ川などとして残っています。

現在、総合博物館となっている旧理学部本館は昭和4年（1929）に138万円で建設されたもので、札幌では初めての本格的鉄筋コンクリート造りでした（写真1）。陸屋根スタイルを採用したのですが、冬期間はさすがもりに悩まされたようです。予算の関係上、窓は一重であった



写真1 総合博物館に改修された旧理学部本館

昭和4年(1929)11月新築。平成11年(1999)4月博物館開館 2014/11/27

ため、すきま風の問題もありました。

この場所は扇状地の末端で地下水が極度に多く、このため当初予定されていた地階の構築が断念されたと言います。一方、湿気を好む植物には好条件であり、南側の一画にはハルニレ *Ulmus davidiana* var. *japonica* (エルム、ニレ科)の巨木が生い茂り、そこは「エルムの森」と称されています。寿命は150~200年と長いので、これらの巨木は札幌農学校開設以前から生えていたと考えられます。構内全体では約900本(昭和60年頃の調査結果)のハルニレがあるとされ、北大は「エルムの学園」と呼ばれています。ハルニレの樹皮、葉、花、果実は何れも小児頭瘡に効果があるとされます。(A)

総合博物館前のクロフネツツジ (G1)

本種 *Rhododendron schlippenbachii* (ツツジ科)は朝鮮、満州、内蒙に分布する落葉性の小高木で、江戸時代末期(初期、中期という説もあり)に渡来したため、当時関心の高かった黒船と名付けら

れたと言われます。5月中、下旬に咲く花は広く開いた鐘型で薄桃色、上部内面に紅褐色の斑点があり、その美しさから“ツツジの女王”と称されています。

総合博物館前の2本は、昭和55年(1980)5月、理学部創立50周年を記念して植物学教室の圃場から移植されたものです。同教室の温室が開設された昭和初期、関西の種苗店から入れた当時は高さ約90cm、推定樹齢14、5年でした。従って、昭和61年(1986)の撮影時で約70年、今では1世紀を生きたことになります。(A)

太秦先生と小熊先生の旧宅 (G2)

太秦康光先生は言わずと知れた分析化学講座初代教授で、小熊捍先生は生物学科動物形態学講座初代教授(第3代理学部長)です。

両教授邸とも北海道ゆかりの建築家である田上義也氏の設計によるもので、小熊邸は、昭和2年(1927)、太秦邸は、昭和6年(1931)8月に竣工しました。

太秦邸は、南1条西21丁目にありましたが、2階の陸屋根と片流れ屋根、階段室の垂直性を強調した嵌め殺しの窓、この三つの直線の組み合わせが、建築の表情にダイナミズムを与えています。平成7年(1995)に取り壊されましたが、設計図書や仕様書により往時を知ることができます。

一方、小熊邸は、南1条西20丁目から藻岩山ロープウェイの山麓駅近く(札幌市中央区伏見5丁目)に移築され喫茶店として今なお現役で、札幌市の「さっぽろ・ふるさと文化百選」に選ばれた歴史的にも価値があるものです。

二つの建物が揃っていた90年代までは、この一郭に異彩を放っていました。それにしても立派、モダンな面構えですね。

現在、両邸のあとにはそれぞれマンションが建ち、また、前面道路は市電が昭和48年（1973）に廃止となり、グリーンベルトを挟んだ片側2車線の広い通りとなるなど、当時の面影を偲ぶものは無くなってしまいました。（S）

旧札幌農学校図書館読書室（G2）

昭和40年（1965）に現在の附属図書館本館に移転するまで中央図書館読書室として使われていた建物で、明治35年（1902）に竣工しました。この時期、札幌農学校は北1条キャンパスから北8条キャンパスに移転しており、その際に新築された一連の建造物の一つです。写真の建物は、図書館読書室などとして利用されたものであり、その後方には4万5000冊を収容した煉瓦造2階建の書庫があり、いずれも現存しています。国の登録重要文化財となった現在もサステナビリティ学教育研究センター・北大出版会として利用されています。写真では屋根が緑色ですが、現在は竣工当時の赤色に塗られています。

今では、北大構内でも高層建築が目立つなか、小ぢんまりとした平屋の建物に心の安らぎを覚えるのは筆者だけでしょうか。（S）

古河記念講堂（G2）

古河財閥の寄付で建設された建造物の一つとして明治42年（1909）に竣工し、東北帝国大学農科大学林学教室として使

用され、現在、国の登録重要文化財となっています。木造2階建のこの建物は、両翼にマンサード屋根をかけ、中央ポーチにはバラストレード形の屋根をつけているフランス様式の建物で、この時期に建造された一連の校舎群の中では最も様式性の高い建物です。

写真では、ところどころに煙突が立ち、建物も傷みが目立ちますが、林学教室として使われた後は、教養部本館として使われていました。現在は、文学部の研究室として利用されていますが、修復改装され美しい姿で保存されています。玄関右に写っているイチイの木は、半世紀の間に大きく成長し、時の流れを感じさせます（写真2）。（S）

モデルバーン（模範家畜房）（G2）

札幌農学校2代目教頭のホイーラーの設計により、明治10年（1877）に竣工したこの建物は、その名のとおり、北海道に新しい大規模有畜農業を取り入れるためのモデルとなりました。1909～1910年に現在の場所に移築されるまでは、地球



写真2 古河記念講堂

グラビア写真撮影から約60年後、イチイは玄関を隠す程の大きさに生長
右後方は経済学部棟 2014/11/27

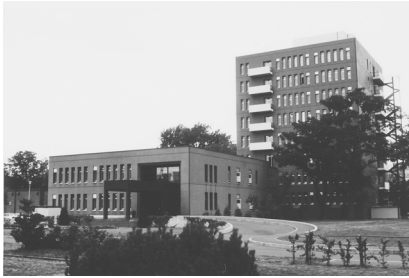


写真3 地球環境科学研究院棟

昭和55年（1980）3月新築、北大施設高層化の嚆矢
撮影当時は環境科学研究科棟 1986/9/10

環境科学研究院棟（北10西5、写真3）のあたりにありました。バルーンフレーム構造の本邦最古の洋式農業建築物で、明治期の洋風建築として建築学史上でも大変価値あるものとされており、昭和44年（1969）に国の重要文化財に指定されています。

この写真から半世紀が経ち、周辺環境はエルムトンネルの完成やマンション群の林立など、かつての牧歌的な雰囲気から大きく変貌してしまいましたが、どしりとした構えは現在も昔のままです。（S）

旧農学部畜産学教室（G2）

この建物も古河記念講堂と同様、札幌農学校から東北帝国大学農科大学に組織改正された際に建設された一連の建物の一つで、旧農学部畜産学教室として使われ、大正3年（1914）には増築されて写真のような姿（中央ローンから撮影）になりました。その後、教養部が現在の北17条に移設する昭和30年代後半まで、教養部第三講堂として使われていました。

当時の教養部の校舎は、本館の古河記念講堂と六つの講堂に分散されていました。

この場所は、現在の附属図書館本館に位置しており、図書館新設計画により取り壊されました。従って、この写真は取り壊し直前の畜産学教室の状況と思われます。写真手前の広場は現在の附属図書館前庭で、かつては教育学部幼稚園の運動会が開催されていました。（S）

山下生化学研究室（G3）

後出のファカルティハウス・エンレイソウの真向かい、中央道路を挟んで歯学部専用駐車場となっている場所に、数々の伝説の場となった“山下”がありました（写真4）。周囲の木々に埋もれて生える1本の老イチイが、当時の正面玄関の位置を示す唯一の目印です（写真5）。

その玄関に入ると、右壁に当時の文部



写真4 山下生化学研究室正面

北海道大学文学書館提供 撮影年不明



写真5 山下生化学研究室正面玄関前に
あったイチイ

奥は歯学部専用駐車場 2014/10/31

大臣荒木貞夫陸軍大将揮毫「温故知新」の石版レリーフが掲げられ、更にその下には「山下生化学研究室／本建築物は設備と共に／山下太郎氏の寄附に掛る／氏は本学園に在りし人／常に化学研究に關心を／有すること深し 時局に／鑑み修學を記念せんとし／仍て本研究室成る／昭和十三年十二月」の文字がありました。

山下太郎氏は秋田県出身、明治42年（1909）に東北帝国大学農科大学を卒業した元アラビア石油(株)社長で、“満州太郎”、“アラビア太郎”という異名を全国に轟かせました。同郷、同窓の田所哲太郎先生の求めに応じた寄付金28万円により、本研究室は昭和14年（1939）9月に竣工されました。地上1階は有機化学、2階は生物化学両教室が使用し、田所先生の自然食、酵素研究、杉野目晴貞先生のトリカブト研究を始めとして、歴史に残る数々の研究がなされました。老朽化により昭和51年（1976）にその役目を終え、埋蔵文化財研究室等に使用された後、昭和58年（1983）に惜しまれながら解体されました。

本誌第22号（昭和49年2月刊）では消えゆく“山下”の特集が生まれ、本号でも荒木義雄（化35）、鈴木洋二（化37）及び松永旭（化修17）のOB各氏がその思い出を寄せられています。荒木氏は上記石版のその後にも言及され、写真も掲載されています。（A）

施設の高層化（G3）

平成5年（1993）に始まった大学院重点化や既存の建物の老朽化などにより、各施設の新築や増改築が行なわれましたが、理学部、工学部、医学部附属病院は敷地的制約から高層化して建築されました。理学部本館の総合博物館転換計画に伴い旧二号館は取り壊され、平成6年3月に新築された二号館に物理学科と高分子学科が入り、平成11年には五号館が新築されました（写真6）。講義などに使われる五号館大講堂の階段は急で、下から見上げるとかなり威圧されます。

平成14年（2002）6月、旧化学科7研究室は旧触媒研究所の南に新築された11階建の高層棟と低層棟からなる六号館（写真7）に移転しました。研究室は低



写真6 理学部五号館の低層棟と高層棟

左奥は総合博物館、中央は二号館 2014/10/31



写真7 理学部六号館の低層棟と高層棟

左の建物は八号館（旧触媒研究所）、手前の道路は旧国鉄構内鉄道引込線跡地 2014/11/27



写真9 化学同窓会事務局

隣の教室と同じ床面積で天井も低い 2014/11/24



写真8 理学部六号館西側の窓からの遠望

2014/11/24

層棟と高層棟の4～7階にあり、西側の窓からは藻岩山、手稲山が一望に見渡せます（写真8）が、教授室の天井は低くなり、床面積も縮小されました（写真9）。

当初、この六号館に連結する七号館の新築も計画されていましたが、六号館新築後に見直しがあり、既存の旧化学第二学科7研究室が入る建物を耐震改築して七号館とすることとなりました。それに伴い、講義室C-316は7-310と名前を変えられました。その入口手前には鈴木章先生のレリーフ像（本誌第60号のグラビ

ア、35及び67頁）が掲げられ、その右側には同窓会コーナーがあります。同コーナーは化学科創立75周年記念事業の一つとして設置されたもので、事業の趣旨、寄付者名簿、教授系譜、パネルが掲げられ、るつばバックナンバー等も置かれています。（A）

柴田記念館（旧金属化学研究室）とファカルティハウス・エンレイソウ（G4）

金属及びその精錬の化学的研究を行なうことを目的とし、柴田善一無機化学講座初代教授は田所哲太郎理学部長（当時）などと協力して民間の金属関係各社から寄付金を募り、工学部の協力も得て、鉄筋2階建（後に一部3階建）の金属化学研究室を竣工させました。昭和12年（1937）12月のことです。昭和33年（1958）4月からは工学部附属研究施設として正式に認可されましたが、昭和45年（1970）には増改築された工学部本館に移転しその役目を終えました。その後は柴田記念館と命名されて他に転用され、丹羽貴藏先生の研究（実験）室兼事務室として

利用されましたが、平成6年(1994)に解体されました。窓はスチール製のフランス窓で洒落た趣があり、三角屋根の下にある玄関にはツタが広がっていました。グラビア写真2葉と写真10を提供された新谷光二(化学26期)氏は、本誌第61号28頁で本記念館のことに触れられています。

本部福利施設ファカルティハウス・エンレイソウは、平成7年(1995)3月にその跡地(北11西8)に新築されました。3つの会議室、ギャラリー及びレストラ



写真10 解体直前の柴田記念館

スチール製のフランス窓が見える北側の壁面。三角屋根の下部が玄関
1994/3/15 新谷光二氏提供



写真11 人工雪誕生の地記念碑

旧常時低温研究室跡地で、左にファカルティハウス・エンレイソウ正面玄関 2014/11/27

ン・エルムがあり、教職員の会合や美術系サークルの展覧会などの行事に利用されています。本同窓会でも編集会議や理事会で会議室を、新年会などでレストランを利用しています。レストランは一般の方も自由に利用できます。

前庭は中谷宇吉郎博士が雪の結晶を人工的に作ることに成功した常時低温研究室跡地であり、入口右側には人工雪誕生の地記念碑(写真11)が設置されています。(A)

ポプラと北大(G2, 3)

ヨーロッパ、西アジア原産のセイヨウハコヤナギ *Populus nigra* var. *italica* (ヤナギ科)は明治時代中頃から街路樹などとして植栽され、ポプラとして親しまれています。雄花は暗赤色、雌花は黄緑色



写真12 中央食堂前のポプラ切り株
2014/11/27

で、4月から5月にかけて開花します。

昭和7年(1932)に描かれた北大全景の絵には、南東部を中心にポプラとおぼしき高木が数多く見られます。完成間もない理学部本館北側にもポプラ並木の西に向かって、中央道路に沿って北に向かって多数のポプラが植えられています。現中央食堂前のポプラ12本は平成14年(2002)1月に切り倒され、現在は朽ちかけた切り株のみが当時の面影を残しています(写真12)。(A)

ポプラ並木と平成ポプラ並木(G1, 4)

全国的に有名なポプラ並木には100年以上の歴史があります。明治36年(1903)にまず数本が、45年(1912)春に苗木45本が林学科学学生実習の一環として植えられ立派な並木となりました。ポプラは高木であるため強風に弱く、これまでも昭和29年(1954)の洞爺丸台風、34年(1959)の台風14号で倒れ、存続の危機に陥ったことがありました。そして平成16年(2004)9月8日、台風18号の暴風によってキャンパス内の樹木9,500本のうち1,500本が倒れ、ポプラ並木も半数近く

が倒壊するという壊滅的な被害を受けました。その後、全国から集まった寄付金を基に再生事業が進められ、今では倒壊前の姿を取り戻しつつあります。

創基125周年記念事業の一つとして、平成12年(2000)10月18日、第一農場の北西部、北大球場及びサークル会館の南側に苗木70本が、500人近い市民により植樹されました。経済学部生の提案によるもので、苗木は上記のポプラの枝を挿し木したものです。参加証には「15~20年後には、高さ20メートル程度の立派な並木になると思います」と記されています(姉帯保存、写真13)。14年後の現在は立派な並木となっていますが、知名度はまだ低いようで観光客の姿はほとんど見られません。(A)

イチョウ並木(G4)

薬学部の北側、北13条通りにイチョウ *Ginkgo biloba* (イチョウ科) が植えられたのは、昭和14年(1939)のようです。道路の両側に整然と並ぶ70本が約380メートルのトンネルを形作っており、特に10月下旬から11月上旬にかけての黄葉



写真13 平成ポプラ並木記念植樹参加証

堂垣内尚弘元知事列席の下、平成12年(2000)10月18日実施



写真14 イチョウの葉と果実

10月下旬は銀杏拾いの人たちで賑わう
1983/10/30

は見事です。近年は多くの観光客が訪れ、夜間のライトアップもされるため、マスコミでも大きく取り上げられるようになりました。

ただ、熟した果実(写真14)は酪酸やヘプタン酸を含有するため、歩道には異臭が漂い、靴底に染み込んだ臭いが消えるまで時間がかかります。また、銀杏と称される種子はビタミンB₆を欠乏させる4'-O-methylpyridoxineを含有するため、多食または生食すると痙攣を起こして死亡することがあります。乾燥した葉(銀杏葉)には血管拡張作用、平滑筋痙攣緩和作用、気管支拡張作用が知られ、狭心症、高脂血症などに応用されます。(A)

構内環境整備と大野池 (G 4)

施設の高層化が始まった頃、案内板の設置(写真15)や中央ローン、工学部南側の池周辺の緑地化など、環境整備が重点的に行なわれました。そのひょうたん形の池は湧泉(メム)の一つでサクシュコトニ川の途中にあり、古くは牛馬の飲



写真15 構内環境整備の一環として設置された案内板

総合博物館北東部に設置 2014/11/27

用や農場の取水源として利用されましたが、昭和30年代には湿地に変わっていました。昭和40年代後半、当時の大野和男工学部建築工学科教授は池をもとの姿に戻そうと尽力、やがてそこは「大野池」と称されるようになりました。

平成10年(1998)8月、エコキャンパス推進事業の一環として池の周囲に散策用の木道と休息用ベンチが配され、訪れる観光客や学生の心を和ませる場となりました。4月にはミズバショウが、初夏には岸边にオオバナノエンレイソウが咲き、秋の紅葉は見事です。夏にはスイレンが赤や白の花を付けますが、ハスと勘違いしている人が沢山います。スイレンの葉には切れ目があります(写真16)が、ハスの葉に切れ目はありません。

「初夏になると黄色い子ガモがちよこちよこ泳いでいました。もう、それはそれは可愛いです♡カモちゃん達、来年も渡って来るといいですね!」。大学院生時代、通学途中や実験の合間に立ち寄っていたという東京在住のこの女性は、「北大構内で最も好きな場所」として今も記憶に留め、来札の度に大野池を訪れています。(A)



写真16 大野池に咲くスイレンの花

1983/7/16

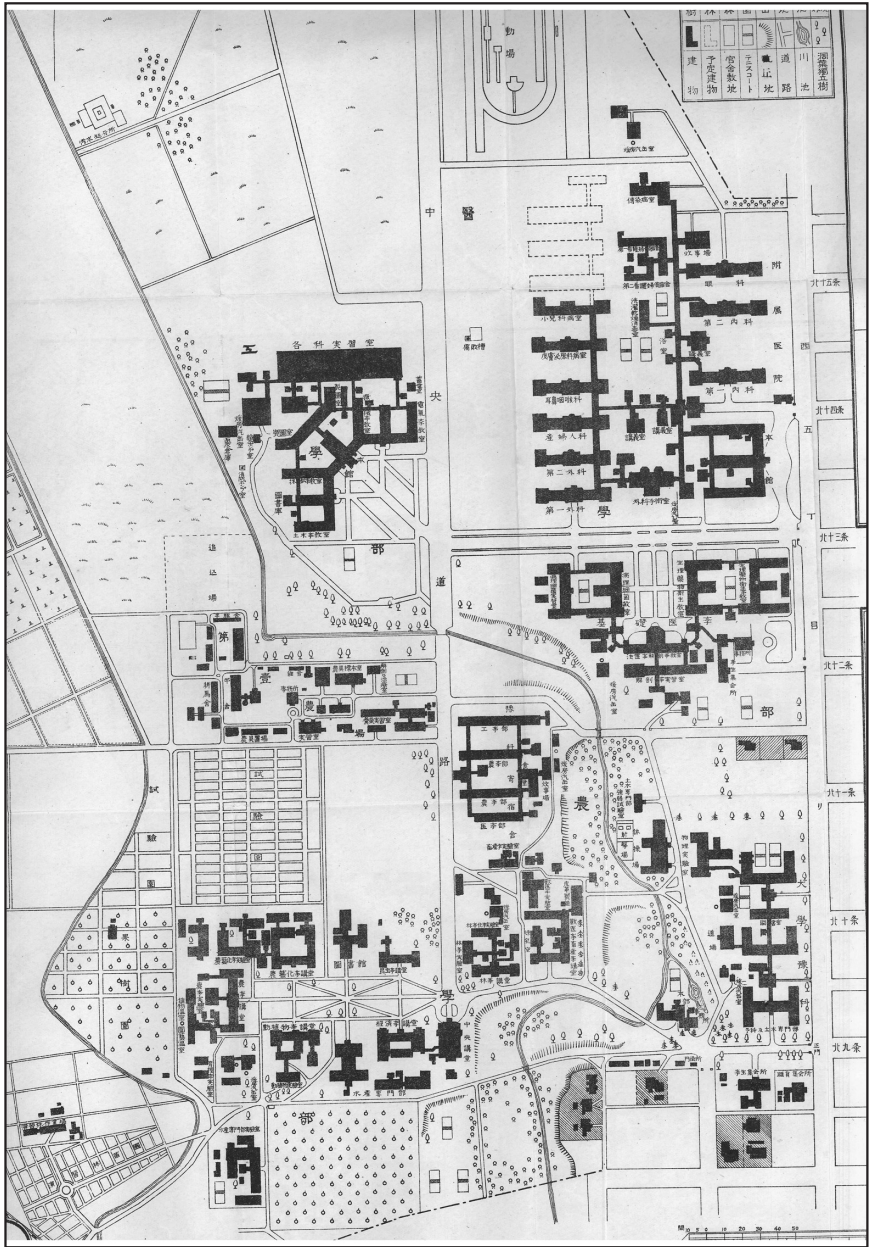


図1 大正15年(1926)頃のキャンパス平面図

典拠：『北海道帝国大学一覽 自大正15年至昭和2年』(昭和2年2月28日発行)

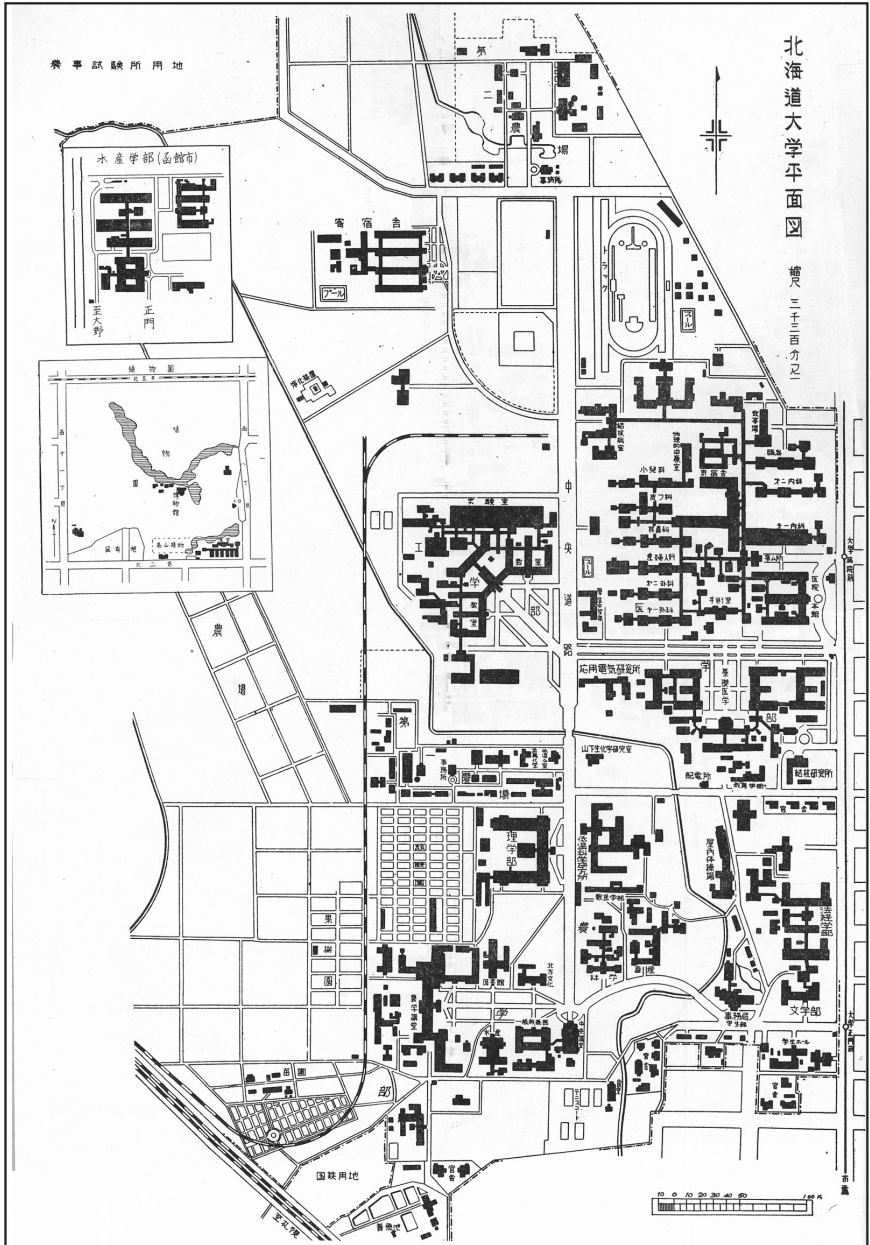


図2 昭和30年(1955)頃のキャンパス平面図

典拠：『北海道大学一覽 自昭和28年至昭和31年』(昭和31年9月5日発行)

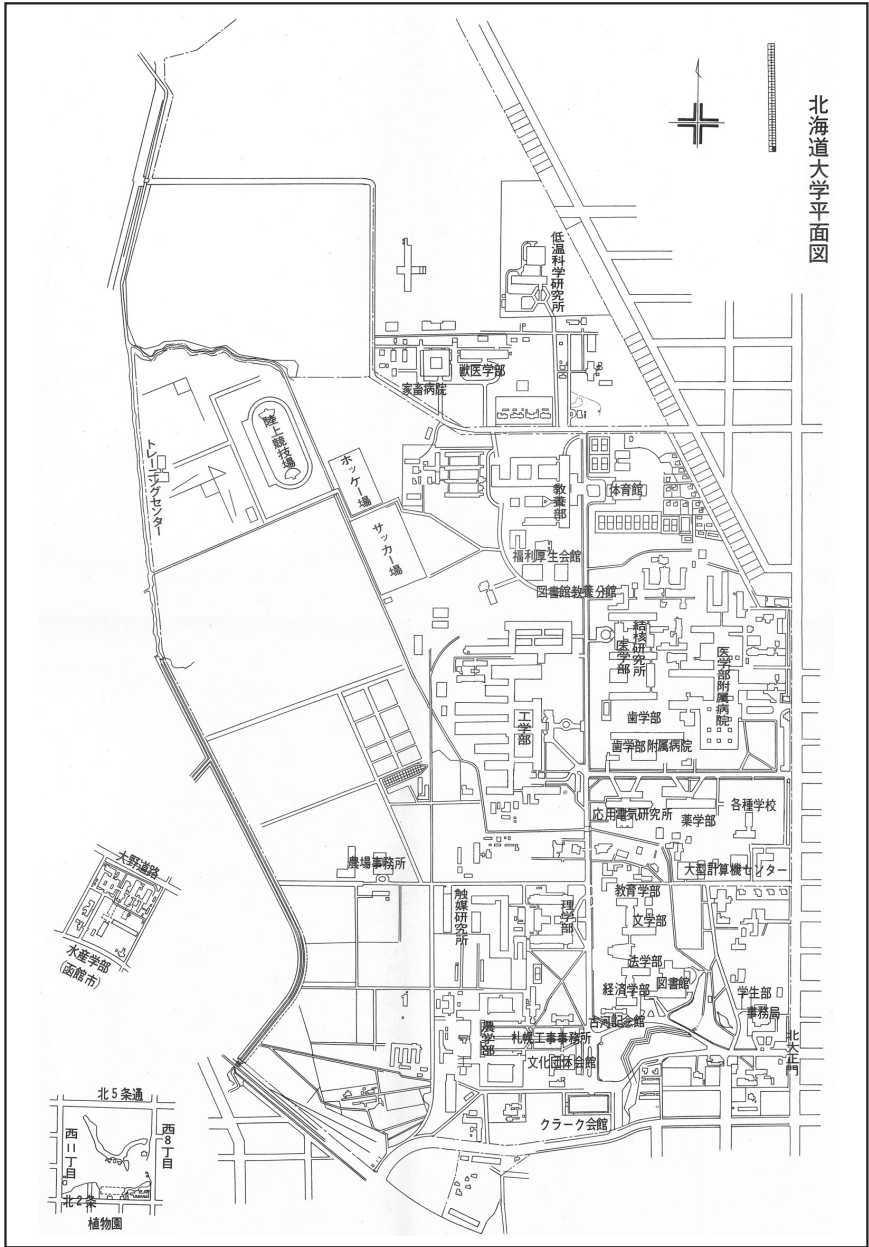


図3 昭和46年(1971)頃のキャンパス平面図

典拠：『北海道大学一覧 昭和46年』(昭和46年12月2日)

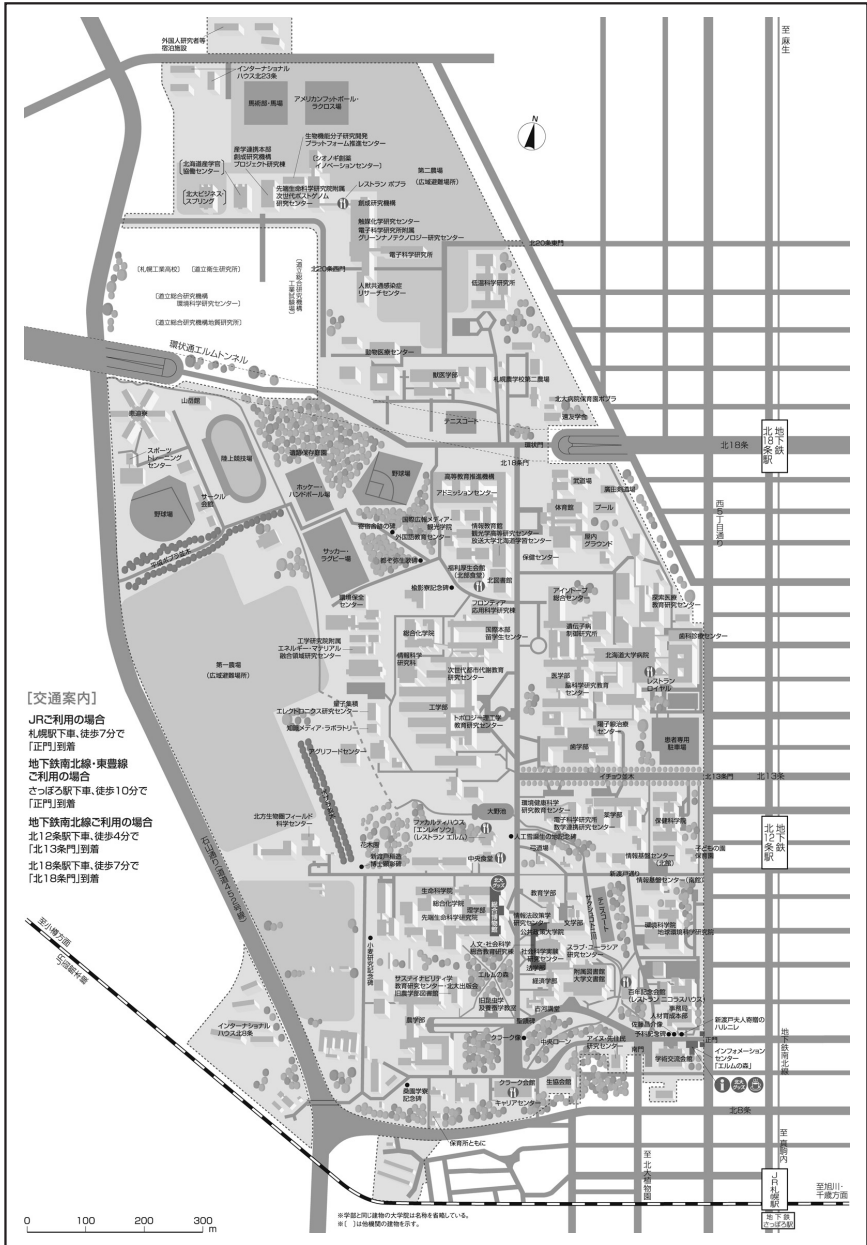


図4 現在のキャンパス平面図

平成26年5月現在。北海道大学事務局総務企画部広報課提供

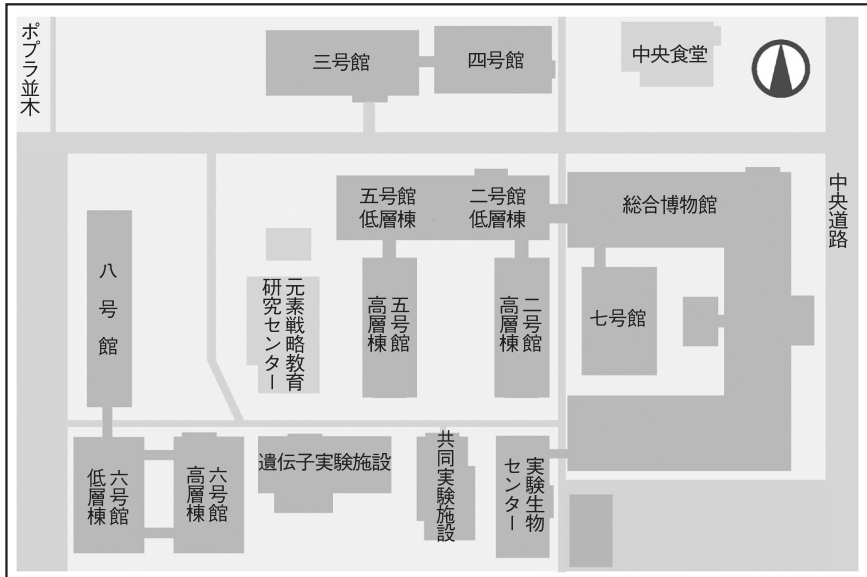


図5 理学部周辺建物配置図（理学・生命科学事務部庶務担当提供の原図に加筆）

註：提供先明記の写真4及び10、事務局撮影の8及び9以外の12葉は姉帯が撮影しました。

〈主な参考文献〉

- 1 北海道大学編著：北大百年史 部局史 教養部、ぎょうせい、1980
- 2 北海道大学編著：北大百年史 通説 教養部、ぎょうせい、1982
- 3 北海道大学編：写真集 北大百年、北海道大学図書出版会、1976
- 4 北海道大学125年史編集室編：写真集 北大125年、北海道大学図書出版会、2002
- 5 北海道大学125年史編集室編：北大の125年、北海道大学図書出版会、2001
- 6 北海道大学125年史編集室編：北大125年史通説編、北海道大学、2003
- 7 北大理学部五十年史編纂委員会編：北大理学部五十年史、北海道大学理学部、1980
- 8 北海道大学理学部同窓会誌第22号、北海道大学理学部同窓会、1980
- 9 岩沢健蔵：北大歴史散歩、北海道大学図書出版会、1986
- 10 札幌市教育委員会編：さっぽろ文庫23 札幌の建物、北海道新聞社、1982
- 11 井内佳津恵：田上義也と札幌モダン、北海道新聞社、2002
- 12 丹羽貴知蔵：楡蔭日記、丹羽貴知蔵先生退官記念事業会、1976
- 13 瀬田波栄潤：リテラボプリ、3、8（2000）
- 14 三橋 博監修：原色牧野和漢薬草大図鑑、北隆館、1988
- 15 山岸 喬、山岸敦子：北海道山菜・木の実図鑑、北海道新聞社、2010
- 16 北海道新聞 1981年8月21日、2000年10月16日、19日、2002年1月26日、2014年9月18日付

北大構内の昔と今（中編）

編集理事 姉帯 正樹
(化学科42期)島崎 昭
(化学科44期)

変容した北15～18条界限

筆者Sが小学生のころ北大付近は、学校区でもあり家も近かったことから、友人とよく北大構内で遊んでいました。特



写真1 2代目恵迪寮全景

1931年に第二農場西の森の中に新築移転された木造二階建

1961年、玄関前に教養部校舎建設開始 1950
北海道大学大学文書館提供



写真2 昭和30年代中頃まであった陸上競技場とラグビー場

2代目恵迪寮前にて 1950 北海道大学大学文書館提供

に北16条から17条にかけては、当時、陸上競技場、ラグビー場、野球場、その南側には、貯炭場と引込線があり、これらが私の遊びのフィールドでした。西側の木々の間には、恵迪寮が建っていました(本誌63号96頁の地図参照。写真1～3)。それが、北大に入学した昭和45年(1970)ころには、全く様変わりしており、かつて陸上競技場のあった場所には屋内体育館が、ラグビー場や野球場は教養部校舎、そして、貯炭場と引込線のあった場所は工学部の駐車場になっていました。

その後、約半世紀、この周辺から第二農場にかけての広大な構内北部は、さら



写真3 北大球場に於ける対東北大定期戦始球式

後方の建物は工学部北面 1959/6 櫻田博久氏(1961経卒)提供(北大準硬式野球部創立35周年記念誌より転載)

に大きな変容を遂げています。そこで今回は、北15条から18条の変遷について、ごく一部を辿ってみます。(S)

遠友学舎と新渡戸稲造顕彰碑

北18条通り（環状通り）を挟んで北には、昨年紹介したモデルバーンがありますが、かつてその東隣には、馬術部の厩舎（写真4）や馬場があり、学生たちが障害などの練習をしていたのが印象に残っています。現在、ここには、北大創基125周年記念事業の一環として、平成13年（2001）9月に竣工した「遠友学舎」



写真4 馬術部厩舎北東面

エルムトンネル工事に伴い解体 1991 北海道大学大学文書館提供



写真5 遠友学舎

北大創基125周年記念 2014/9/29

が建っています（写真5）。

この学舎は、21世紀に向けた豊かな北大キャンパスの新しいシンボルとして、地域と大学とのコミュニケーションの拠点の役割を担っており、地域の開かれた散策・憩いの場となっています。主体構造は、鉄筋コンクリート、屋根部分がテンション材を用いた木造という大胆な構造です。また、モデルバーンという北大創設期の風景を最も良く残す地域に隣接するため、モデルバーンと同じ切妻屋根とすることで、連続性を持たせた原風景の再生として位置付けられています。

「遠友学舎」という名称は、明治27年（1894）に新渡戸稲造夫妻が、貧しさから教育をうけられない若者たちのために、現在の札幌市豊平橋付近に開いた男女共学の夜学校「遠友夜学校」に由来しています。

新渡戸稲造博士の名前が出てきたので、ここからは離れていますが、博士の顕彰碑についても触れておきましょう。

新渡戸稲造博士（1862—1933）は、ご承知のとおり、札幌農学校の二期卒業生で、母校の教授や遠友夜学校の創設などの教育者の面ばかりでなく、国際連盟の事務局次長として国際文化活動にも尽くされた国際人でもありました。国内初の農学博士号取得者でもあります。その新渡戸博士の顕彰碑は、北大創基120周年を記念して「新渡戸稲造博士顕彰碑建立事業会」から寄贈され、ポプラ並木の東側にある「花木園」の入り口に平成8年（1996）10月に建立されました（写真6）。碑には、博士の言葉である「I wish to be a bridge across the Pacific」と刻まれています。(S)



写真6 新渡戸稲造博士顕彰碑

北大創基120周年記念 ポプラ並木東側の花木園内 2014/10/31



写真7 構内引込線と石炭列車

ポプラ並木の横を桑園駅に向かって走る蒸気機関車 C55 1961頃 北海道大学大学文書館提供

石炭列車と鈴木章ホール

現在、フロンティア応用科学研究棟が建っている場所は、昭和27年（1952）から39年（1964）の12年間、大学構内としては全国でも珍しい引込線がありました（正式な名称は「北海道大学構内鉄道引込線」）。この引込線は、北大キャンパスのボイラー用石炭を運ぶために付設されたもので、秋になるとSLに引かれた石炭列車が桑園駅を出発して、ポプラ並木の横をぬけ、サクシュコトニ川の小さな鉄橋を渡ってゆっくりと約1.5kmの鉄路をやってきたものです（写真7）。

その後、燃料が石炭から重油に変わり、また、工学部の増改築などにより、引込線は貯炭場とともに姿を消し、工学部の駐車場として長らく利用されていまし

た。

現在の研究棟（写真8）は、平成26年（2014）6月12日に落成しましたが、この棟のシンボリックな存在が、「鈴木章ホール」です。このホールは、平成22年（2010）



写真8 フロンティア応用科学研究棟

2014/9/29

にノーベル化学賞を受賞された鈴木章先生（化24）の功績を継承し、後進を育成するため、我が国の先端的应用化学を応用物理・環境工学と融合させた物質科学の更なる発展を目指した研究・教育拠点として建設されました。235名収容のホールは、最新鋭の大型スクリーン、大型液晶ディスプレイが設置され、また、通常より横幅に余裕を持たせた特注品の座席は、全席コンセントと収納可能な簡易テーブルを備え付けています。なお、最前列の左右各二席は車いす利用に対応した可動席となっています(本誌第63号113頁参照)。(S)

教養部から高等教育推進機構アドミッションセンターへ

かつてラグビー場や野球場があった場所は、その後、教養部の一連の建物となりました。教養部(写真9)は、その後、高等教育機能開発総合センターを経て、平成22年(2010)10月からは、高等教育推進機構アドミッションセンターへとその機能及び名称が変更されていますが、建物そのものは概ね当時のままです。

これらの建物は、昭和36年(1961)3



写真9 南東から見た教養部校舎

1976 北海道大学大学文書館提供

月のN棟の竣工を始めとしてE棟、S棟と順次竣工し、概ね昭和43年(1968)までに整備を終えています。

なお、キャンパスを南北に貫く中央通りを挟んで東側のかつて陸上競技場のトラックがあった場所は、昭和38年(1963)3月に完成した体育館(雨天体操場)や昭和48年(1973)3月に完成した武道場となっています(写真10、11)。(S)

野球大会と野球場の変遷

「研究室だより」には雑誌会主催化学科野球大会の悲喜こもごもが時々書かれています。今も本気で勝利を求め一丸と



写真10 体育館と武道場

左奥が武道場 左手前は教養部体育教官棟
1973頃 北海道大学大学文書館提供



写真11 現在の体育館入口付近

増築されて建設時とは大きく異なる入口
2014/9/29

なって練習に取り組み、試合には応援の女子を含めて全員が保険料を支払って臨む全研究室参加の一大イベントとなっています。正にレクリエーションの範疇を超えた伝統的熱き戦いと言えます。本誌第27号によれば、本大会の始まりは昭和25年（1950）頃なので60年以上の歴史を持つことになり、その舞台となる球場も時代に応じて替わっています。

写真12は昭和27年6月、この頃常勝の有機チームが無機・分析チームにリードされた際、正宗直（化15）主将が敢然と三塁へヘッドスライディングした場面です。「たかが学部内の親善野球程度のものなのに、直^{ちよく}さんはこのようにむきになって必死でやった」は写真旧蔵者である那須義和（化22）氏の言葉。球場は旧教養部棟の南側、附属図書館北図書館が建っている位置にあり、硬式野球部と準硬式野球部が背中合わせに使っていました。

太平洋戦争突入半年後の昭和17年（1942）6月28日、第38回北大予科一小樽高商戦が本球場で行われ、その写真が『北海道大学野球部100年史』（2001）の



写真12 化学科野球大会の一コマ

走者：正宗直（化15） 於旧北大球場（現北図書館） 1952/6

表紙を飾っています。因みに、予科の1番は今宮明男（化16）三塁手であり、この後の野球班廃止命令で本戦が最後の定期戦となりました。

昭和38年（1963）、教養部棟新築のために北側部分が北大球場（一般名称A球場）として現在地へ移転。残った南側部分も昭和43年（1968）夏、現在の恵迪寮が建つ場所へB球場として移転しました。以後、両球場で今日まで語り継がれる幾多の名勝負が繰り広げられました（写真13）。化学第二学科も講座対抗野球大会を並行して行っており、両科優勝チーム同士の対戦、オールスター戦もありました。

しかし昭和56年（1981）、老朽化が著しい恵迪寮が現在地に改築されることになり、B球場は消滅。旧恵迪寮跡地（写真14）に現在のB球場が完成したのは、4年後の昭和60年（1985）のことでした。写真15は現B球場における有江幹男学長（当時、故人）の始球式の様子です。

両科が合併してからは授業を休講にして、複数の試合を同時進行できる美香保球場で開催されています。（A）



写真13 化学科野球大会の一コマ

於北大球場（外野：上盛前） 1972/6



写真14 2代目恵迪寮跡の碑

碑銘：佐藤昌介博士の筆蹟 碑文：有江幹男
学長 2013/6/5



写真15 北大B球場完成記念試合始球式

投手：有江幹男学長 主審：竹村八郎（化
26） 先発投手：筆者A 1985/8/24

遺跡保存庭園と古代アイヌの遺跡

かつて北大構内にはサクシュコトニ川とセロンベツ川がコトニ川から分岐して流れており、鮭が遡上していました。千年以上前、古代人は川の周辺に数多くの竪穴住居を構え、明治20年代には700以上の住居跡の存在が知られていました



写真16 遺跡保存庭園入口付近

1982年に整備。門標は有江幹男学長の揮毫
2014/10/8



写真17 竪穴住居跡約30個の一つ

深さ約50cm、直径約5m 2014/9/22

が、開発によりその多くが失われました。現在、わずかに残った住居跡は「遺跡保存庭園」として保護されており、自由に見学できます(写真16、17。本誌第58号29頁参照)。入口の案内板には「この集落は奈良、平安時代前後のもので、擦文文化に属する遺構が・・・」とあります。平成3年(1991)にはアイヌ民族史跡保存会が庭園内に祭壇を設け、先祖供養の儀式イチャルパを行いました。

北大球場東側のサークル会館建設の際(昭和55年)には、3つの竪穴住居跡の

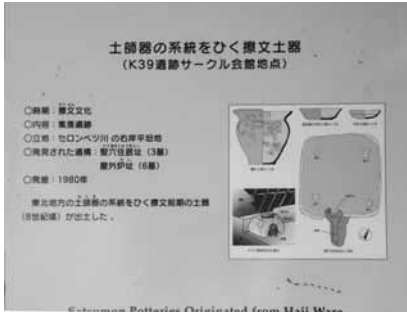


写真18 擦文土器の出土を示す説明板
サークル開館東側 2015/10/6



写真19 サークル会館と北大球場

レフト後方に垣間見えるのは平成ポプラ並木
2015/10/6

他、8世紀頃の擦文土器（土師器系）も出土しました（写真18、19）。更に、恵迪寮新築工事の際、旧B球場本塁付近の地下約1メートルの所から約千年前のテシ（鮭捕獲装置、幅約12メートル）がほぼ完全な形で出土し、関係者を驚かせました（写真20）。しかし、新寮の建設は予定通りに行われ、現在はその地下で眠っています（写真21）。（A）

註：提供先明記の写真1～4、7、9、10及び20
以外の13葉は姉帯が提供または撮影しました。



写真20 出土した魚止堰（アイヌ語でテシ）

吉崎昌一助教授（左）が指さす中央部に開口部
新学生寮建設予定地
北海道新聞社提供（1982/6/13朝刊掲載）



写真21 旧B球場跡地に建てられた3代目
恵迪寮

左手地下に千年前のテシ。手前はサクシユコトニ川 2014/10/1

《主な参考文献》

北海道大学編：北大百年史 部局史、ぎょうせい、1980
北海道大学125年史編集室編：北大125年史 通説編、北海道大学、2003
北海道大学125年史編集室編：北大の125年、北海道大学図書刊行会、2001
北海道大学ホームページ

化学科野球盛衰記：るつぼ、27、103（1978）
100年史編集委員会編：北海道大学野球部100年史、北海道大学図書刊行会、2001
岩沢健蔵：北大歴史散歩、北海道大学図書刊行会、1986
吉崎昌一、岡田淳子編：北大構内の遺跡3 昭和57年度、北海道大学、1984
北海道新聞 1991年11月18日付



北大構内の昔と今（後編）

編集理事 **姉帯 正樹**
(化学科42期)

前編集理事 **島崎 昭**
(化学科44期)

副会長 **荒磯 恒久**
(化学第二学科6期)

変貌し続ける北キャンパス

昭和43年（1968）入学の筆者MAは、モデルバーン西側の道から獣医学部裏手に曲がる小道の角に「牛が飛び出す 注意」の看板を見つけ「ほー、さすが北大！」といたく感動したのを思い出します。その北側には完成間近い低温科学研究所、西側には広大な第二農場とサイロがあり、牛がのんびりと草を食べていました（写真1、2）。それから半世紀近い年月が流れ、獣医学部周辺の様相は一変しました。



写真1 第二農場東端から見た風景

左奥は1年前に移転してきた北海道立衛生研究所。右奥の公務員宿舎は2016年春解体。中央奥のポプラの一部は2004年9月の台風18号で倒壊。低温科学研究所裏（現在の北20条東門のある辺り）にて。1972/10末

現在、その一帯は“北キャンパス”と称され、平成10年（1998）の先端科学技術共同研究センター（後述）を皮切りに、次々と産学官の先端的な研究施設が建ち並び、食堂ポプラもオープンしました（写真3、4）。知的集積を背景に新たな事業創造をねらいとした“Research & Business Park”実現へ向け、現在も建設ラッシュは続いています（本誌第58号29及び43頁参照）。一部の附置研究所も移設されています。

北キャンパスの充実に伴い、構内循環バス（写真5）が15分間隔で走るように



写真2 北19条付近の農場全景

変貌前の第二農場南側の風景で、左奥は北海道立衛生研究所と工業試験場
1976 北海道大学大学文書館提供

なり、低温科学研究所西隣には新たな道路が南北に延びました（写真6）。毎年8月末に開催される北海道マラソンコースの一部にもなっています。また、北20条東門が新設（写真7）され、高等教育推進機構アドミッションセンター（旧教養部）の北にもゲートとサークルが設けられ（写真8）、一般車両の入構には300円が必要になりました。

平成13年（2001）7月、旧教養部校舎北側の地下を東西約1.1kmにわたって横断する環状通エルムトンネルが開通し、分断されていた東西の行き来がスムーズになりました（写真9）。その一帯はドクニンジン *Conium maculatum*（セリ科、哲学者ソクラテスの毒殺で著名）繁殖地の一つであり、トンネル工事（露天掘り）で大量に発生した土砂はサツ

ポロさとらんど等の造成に使用されたため、その自生地が郊外に拡大する結果を招いてしまいました。（MA）

先端科学技術共同研究センター

北キャンパスの“メイフラワー号”と、筆者TAは密かに考えているのが先端科学共同研究センター（写真10）です。平成10年（1998）3月に北キャンパスに建てられた初の北大の施設として竣工しました。この地はそれまで牛がのんびりと草を食む、のどかな農学部第二農場の一角でした。ここに、教官2名、事務官3名が“開拓移民”として入植、近隣の北海道立工業試験場や衛生研究所の“先住民”にお世話になりながら、第二農場を渡る強い北風に耐えて春を待つ日々を送ったのです。そして5年後、北キャン



写真3 第二農場北側上空より見る北キャンパス全景

2015/8/4 産学・地域協働推進機構提供



写真4 食堂「ポプラ」

右は創成科学研究棟、渡り廊下の左には次世代物質生命科学研究センター研究棟
2014/9/24



写真7 新設された北20条東門

正面は創成科学研究棟裏面、左は電子科学研究所東面 2014/9/22



写真5 構内循環バス

創成科学研究棟正面玄関前 2014/9/24



写真8 高等教育推進機構アドミッションセンター(旧教養部)の北側に設けられたゲートとサークル

左には環状通エルムトンネル東側入口
2014/9/29



写真6 獣医学部棟裏から北へ延びる道路

2014/9/24



写真9 環状通エルムトンネル西側

左は札幌工業高校グラウンド 2014/10/1

パスは大変貌を遂げました。大変貌の経過概要は、平成16年（2004）撮影の航空写真と共に本誌第60号36～41頁に掲載していますので参考にしてください。また、写真3を見てください。これは平成27年（2015）にドローンで撮影されました。これら一連の施設は写真1の女性が立っている後ろの野原に建っているのです。

現在、北キャンパスはさらに発展を続け、先端科学技術共同研究センターは名称も北キャンパス総合研究棟3号館となり、設立当時の「産学官連携の中心」は創成科学研究棟（写真4、5、7）に移りました。今、北キャンパスで開発研究やその支援に携わる人は1500人を数えます。20年前に、たった5人が乗っていた“メイフラワー号”は静かに北キャンパスの発展を見守っています。（TA）

低温科学研究所

昭和16年（1941）11月に「低温における科学的現象に関する学理及び応用の研究」を目的として、低温科学研究所が発



写真10 先端科学技術共同研究センター
（現北キャンパス総合研究棟3号館）

通称は先端研、荒磯研究棟 2016/5/9

足しました。その前身は昭和10年（1935）に設置された理学部附属常時低温実験室（写真11）であり、物理学科の中谷宇吉郎教授による人工雪の研究が行われていました。昭和18年、理学部本館正面に木造二階建一部コンクリート三階建の庁舎が完成、初代所長は小熊捍理学部長が兼務しました。終戦後、進駐してきた占領軍によって昭和21年11月まで接收され、この間の研究活動は困難を極めました。昭和31年（1956）から我が国の南極観測事業が始まり、第一次隊からほぼ毎年、低温研の所員または大学院生が南極観測



写真11 理学部附属常時低温実験室

跡地には人工雪誕生の地記念碑 北海道大学
大学文書館提供



写真12 理学部本館前にあった低温科学
研究所

左奥は山下生化学研究室 1959/2
北海道大学大学文書館提供

隊に参加しました。写真12は昭和34年の姿で、左奥には山下生化学研究室の姿も見えます。

昭和43年（1968）、新庁舎が現在地に移転（北19条西8丁目、写真13）し、旧庁舎北側の一部はしばらくの間食堂として利用されました。その裏には戦時中に設けられた防空壕が残っており、山下生化学研究室の南向き実験室に机を置いていた筆者 MA は、窓からそれを眺める度に平和のありがたさを感じていました。今は更地となってもう見ることは出来ませんが。(MA)

触媒研究所から触媒科学研究所へ

触媒研究所は熱力学、反応速度論の泰斗である堀内壽郎教授（物理化学講座第2代）の業績を礎にして昭和18年（1943）1月に設立、触媒反応の基礎的研究と共に歩きました。三階建の実験研究棟は昭和39年（1964）3月末、ポプラ並木の直ぐ南側に完成（北11条西10丁目、写真14）、それまでは低温科学研究所に同居していました。



写真13 北キャンパスに移転した低温科学研究所

2016/5/9

平成元年（1989）5月に廃止、「全国共同利用施設として、触媒反応に関する研究を行い、併せて国立大学の教員等で触媒化学分野の研究に従事するものの利用に供すること」を目的とした触媒化学研究センターが設置され、世界的にも有数の触媒化学の研究センターとなりました。平成14年（2002）9月、理学部本館3階北側に引っ越し、更に翌年秋には北キャンパスに新設された創成科学研究棟（北21条西10丁目、写真15）に引っ越ししました。平成27年（2015）10月、触媒科学研究



写真14 触媒研究所

1976 北海道大学大学文書館提供



写真15 触媒科学研究所が入る創成科学研究棟南側

右手前は北20条西門、右奥は電子科学研究所
2016/5/17

究所と名称変更され、現在に至っていません。

なお、旧実験研究棟は改修されて理学部八号館（写真16）となり、地球科学科（旧地質学鉱物学科、旧地球物理学科）が入っています。（MA）

応用電気研究所から電子科学研究所へ

昭和9年（1934）に超短波の医学生理への応用研究が学部を越えて開始され、植物細胞、種子の発芽生育、悪性肉腫などに及ぼす影響の研究が行われました。昭和16年に至り超短波研究室が設置され、山下生化学研究室とイチヨウ並木の間に木造平屋建の建物が新築されました。

間もなく太平洋戦争が勃発、レーダーの開発等が国の死活問題となって、昭和18年には超短波研究所に昇格し、木造二階建の研究室が増築されました（写真17）。終戦により抜本的な再検討がなされ、昭和21年（1946）に「電気の応用に関する総合研究」を目的とする応用電気研究所として再出発、ひろく電子工学と

その各分野への応用を研究することとなりました。昭和41年（1966）には鉄筋コンクリート五階建の研究棟が完成しました（写真18）。

平成4年（1992）4月、「電子科学に関する学理及びその応用の研究」を目的とする電子科学研究所に改組され、それまでの研究実績と人材を電子技術の基盤をなす電子科学の研究に向けることとなりました。平成15年（2003）秋にはイチヨウ並木に面した地から北キャンパスの現



写真17 応用電気研究所の前身である
超短波研究所

北海道大学大学文書館提供



写真16 触媒研究所が衣替えした理学部
八号館

左奥は理学部六号館高棟 2016/5/17



写真18 イチヨウ並木南側にあった応用
電気研究所

1976 北海道大学大学文書館提供



写真19 電子科学研究所

2016/5/9

在地に移転、平成22年（2010）の増築を経て現在に至っています（北21条西10丁目、写真19）。（MA）

結核研究所から遺伝子病制御研究所へ

昭和16年（1941）に医学部有馬英二教授を会長、杉野目晴貞教授（有機化学講座初代）らを理事として財団法人北方結核研究会が設立され、昭和20年（1945）8月に医学部敷地内最南端に木造二階建の北方結核研究所が建てられました（北11条西5丁目、写真20）。これが昭和25年（1950）に文部省に移管され附置研究所として発足、結核症の本態を究め、最



写真20 北方結核研究所

1945頃 北海道大学大学文書館提供

良の予防及び治療法の研究を行い、数多くの成果を挙げました。建物の老朽化により、昭和43年（1968）晩秋には現在の医学部北研究棟（北15条西7丁目）4、5階に移転しました。

その後、結核死亡率及び罹患率が大きく減少したため、免疫現象本態の総合的・科学的研究に方向転換し、昭和49年（1974）6月、名称もそれにふさわしく免疫科学研究所と改められました。

研究分野の拡大等に対応するため、平成12年（2000）2月、遺伝子病制御研究所が免疫科学研究所の改組と医学部附属癌研究施設の廃止によって設置されました（写真21）。「癌、免疫疾患をはじめとして、細胞・分子・遺伝子異常に起因する遺伝子病の病因、病態形成機序、制御に焦点を絞り、これら難治性疾患の研究を分子医学を基盤として進め、それに基づいた診断法、治療法の開発を行うこと」を目指しており、ライフサイエンスの今世紀において、医学・生命科学系の中規模研究所としてその成果が期待されています。（MA）



写真21 遺伝子病制御研究所（左）と
医学部管理棟（右）

2016/5/9

大学院重点化による組織改革

平成5年度から理学研究科の重点化が始まり、各学科組織とカリキュラムの再編が行われました。平成7年(1995)4月、21世紀に向けた化学の新しい展開のため、旧化学科と旧化学第二学科は化学専攻・化学科として新発足、旧来の14講座をくくり直して、分子構造化学、物性解析化学、機能分子化学、生命分子化学及び分子変換化学の5大講座(基幹講座)と超分子化学(電子科学研究所)、生体防御化学(遺伝子病制御研究所)の2協力講座からなる組織に改編しました。これに触媒化学研究センターの触媒設計化学分野と分子集合体化学分野が教育協力で加わる一方、長い間化学第二専攻のメンバーであった低温科学研究所生化学部門が協力講座から外れました。(MA)

時計台(番外編)

本同窓会関係者にとって、時計台も忘れられない建造物です。しかし、北大構内から離れた場所にあり、また、本同窓会とは直接関係ないことから、番外編として紹介します。

元々は、札幌農学校演武場として明治11年(1878)に建設されましたが、同36年(1903)に農学校が現在の北大の地に移転した際に札幌区に貸付けられ、さらに、同39年(1906)に区に移管されるとともに現在の場所に移築されました。その後、同44年(1911)には、北海道教育会が札幌区から借り受け、付属の公開図書館としました。戦後は、昭和25年(1950)から41年(1966)までは、札幌市立図書館として長く使われていました。建設当時の農学校の面影を偲ぶ唯一の建造物と

なり、昭和45年(1970)には国の重要文化財に指定されました。

現在は、1階が展示室として、また、2階がイベント会場として、音楽会や講演会のほか結婚式場として利用されています。高階哲夫が作詞作曲し、妻であった村井満寿が歌った「時計台の鐘」は有名な歌曲ですが、その鐘は今でも毎正時に澄んだ音を鳴らしています。

写真22は、昭和31年(1956)の晩秋に当時の産業会館前(現在は、札幌市役所



写真22 時計台南面

1956/11/10 島崎英一(化6)撮影



写真23 現在の時計台南面

2016/7/30

の駐車場辺り) から撮影されたものですが、当時の冬支度の風物詩であったマキが路上に積み上げられており、ベンチが見受けられるなど何と長閑なことでしょう。なお、真ん中の細い木は、現在でも巨木となって残っています (写真23)。(AS)

大学村、大学村の森 (番外編)

同じく番外編として、大学村と大学村の森を紹介します。

戦後、新設学部を増設などに伴い悪化していた教職員の住宅事情を解決するために、杉野目晴貞先生の発案により学内に住宅委員会の制度が設けられ、その具体化の一環として、第三農場の一部であった現在の東区北26条から28条の東2丁目から5丁目辺り(建設当時に札幌村から札幌市に編入)に、昭和25年(1950)に10万円住宅と言われた、今思えばマッチ箱のような教職員住宅が建設されました(写真24)。これが通称、大学村です。ピーク時には250戸を数えた村には、幼稚園も併設され、毎年、運動会も開かれていたと聞きます。大学村の初代村長、そして幼稚園の初代園長は、丹羽貴知蔵先生(化1)でした。

また、住宅を囲むように、1haばかりの森と呼ばれていた緑地があり、子供



写真24 大学村大通り

1951春 北海道大学大学文書館提供

たちの格好の遊び場でもありました。筆者ASも自宅とは10丁ばかり離れていましたが、小学校低学年のころは、村も同じ校区で友人がいたため、この森でよく遊んだ記憶があります。その後、教職員住宅は、いつの間になくなり、森は、昭和57年(1982)に札幌市に移管され、都市緑地としてあらたな歩みを始め、現在は、周辺の職員住宅跡地の一部も取り込んで1.8haの「大学村の森」として整備され、市民の憩いの場として活用されています(写真25)。森の周辺も昔とは様相が一変してしまいましたが、当時を偲ばせる唯一の建造物として、大学湯という銭湯が残っています。

なお、大学村設置の経緯や入居後のエピソードについては、昭和55年(1980)に北海道新聞夕刊に連載されていた丹羽先生の「大学と私」に詳しく載っています。

宿舍関係で更に時代を遡ると、有島武郎邸跡(北12西3)や新渡戸稲造居住地(札幌農学校宿舍跡、北3西1、写真26)が残っているのですが、紙幅の関係もありますので、この辺りで擱筆することにします。(AS)



写真25 大学村の森

2016/7/30

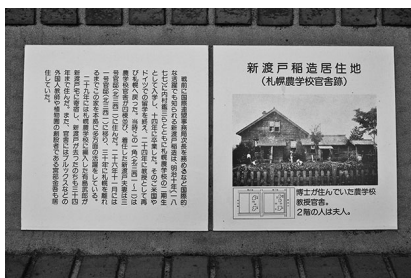


写真26 新渡戸稲造居住地（札幌農学校宿舎跡）説明板

全日空ホテル玄関前 2016/7/30

おわりに

旧化学科、旧化学第二学科を卒業されて時間の経った方々、懐かしい北大の最近の変貌ぶりを感じ取って頂けたでしょうか？ また、最近の姿しか知らない若い方々は歴史の重みを感じ取って頂けたでしょうか？

本稿を作成して、写真の持つ大きな力を再認識しました。貴重な古い写真をお借りした大学文書館では、構内の風景や諸活動が回顧できる写真・資料の蒐集を続けています。今回の連載で使用した写真の多くを電子データとして提供したところ、その一部は展示ホールで公開されています。また、化学科も平成42年(2030)の創立100周年に向けて昔の写真や資料を集め始め、施錠できる保管場所も確保しました。同窓生各位も古い写真などを整理される際は本同窓会事務局（☎011-706-4624）または大学文書館（☎011-706-2395）にご連絡の上、ご協力頂けますなら幸いです。

北大の前身である札幌農学校開校は明治9年(1876)のことで、平成28年(2016)はちょうど140周年にあたり、本稿はそ

の歴史と施設等の変貌のごく一部を紹介したに過ぎません。しかし数十年後、総合大学として更なる発展と変貌を続けた北大の過去の姿を留めた歴史的資料の一つとなれば望外の喜びです。

本連載を終えるにあたり、全文の校閲をお願いした中村義男（化30）名誉教授及び写真提供にご尽力頂いた大学文書館山本美穂子技術専門職員に深謝致します。また、写真提供された新谷光二（化26）、谷本憲彦（化53）両氏、産学・地域協働推進機構及び種々ご協力頂いた本同窓会関係各位にも改めて感謝申し上げます。（MA）

註：提供先明記の写真2、3、11、12、14、17、18、20及び24以外の14葉は姉帯が撮影、写真22、23、25及び26は島崎が撮影または提供しました。

《主な参考文献》

- 北海道大学編：北大百年史 通説編、北海道大学、1982
- 北海道大学百二十五年史編集室編：北大百二十五年史 通説編、北海道大学、2003
- 北海道大学編：写真集北大百年、北海道大学、1976
- 北海道大学125年史編集室編：写真集北大125年、北海道大学図書刊行会、2002
- 岩沢健蔵：北大歴史散歩、北海道大学図書刊行会、1986
- 札幌市教育委員会編：さっぽろ文庫6 時計台、北海道新聞社、1978
- 藤本 啓、佐藤正幸、兼俊明夫、姉帯正樹：北海道公衆衛生学雑誌、**28**(2)、135 (2015)
- 荒磯恒久：Littera Populi、2004 Winter、p.16
- 丹羽貴知蔵：大学と私^⑬、^⑭、^⑮、^⑯、北海道新聞（夕刊、市内版）昭和55年（1980）9月26日、29日、30日、10月1日